

英語教育雑感

吉 家 哲 夫

はじめに

私はこの三月で本学を自主退職する。十二年間英語を教えたことになる。最後の二年間は英文学科の授業も担当したが、十年間は英語を専攻としない学生だけを受け持った。サラリーマンからの転身であったので、正直なところ、これほど長く勤められるとは思っておらず、今振り返って大変幸せに思う。この間にいろいろ感ずることがあった。大学を去るにあたって思いつくままそれらを書こうと思う。

1. 教師と学生との関係が昔と違う。

数年前ある入学式の席上、教育界のトップを務めていた人が私にとって衝撃的な言葉を放った。曰く、教える者、教えられる者という関係でなく、云々と。心底愕然とした。このような理念から発する教育方針はすべて間違っているのではないか。両者の立場は全く違う筈である。よく、学生の目線に合わせて、と言われるが、それは教師の側が学生のレベルまで降りて行くということではあるまい。完全無欠な教師とは言えなくても少なくとも担当の教科に関する知識において、教師は学生を遥かに凌駕していなくてはならないし、そのために教師はいつまでも最大限の努力を重ねるべきだと思う。学生はそうした教師との知識の差に気づき、驚きと尊敬の念をもって、この先生から学ぼうという姿勢を持つ、これが理想の形であろう。

しかし現実はどうか。学生の側に友達感覚が強いのではないだろうか。教師を友達と思ったら、その人から学ぼうとは思うまい。なぜこうなってしまったのだろうか。簡単に言えば、悪しき平等主義である。教師は専門職だ。専門とはそのことにかけては素人とは違うということである。しかし世の中には相手は自分より上ということをも認めたがらない人種が居る。それがニュースに頻繁に出るようになった「理不尽な親」であろう。高学歴時代とは言っても自分の子供の教師が務まるような親は滅多にいない。もし居るとすれば子供のレベルが

とても低いから務まるのである。そこがプロとアマの違い。例え虚像であっても親から「先生は偉い人、だから先生の話をよく聞きなさい」と教えられていない子供は本当に不幸である。教師から学ぶ、ということがないからである。教師を馬鹿にする親は、そのことで一番損をするのが我が子であることに気付かない。

2. 今の日本では専門家に対する評価が低い。

戦後の悪しき平等意識の所為か、専門家と素人の違いを認めたがらない人種が多いのではないだろうか。専門家のレベルにもいろいろあろうが、それでも素人とはその分野については力の差がある筈である。それを正當に評価し認めその力を利用することが世の中が効率的に回っていくことになるのではないか。聞くところでは教育委員会もメンバーの多くが教育界以外の人と聞く。民主主義のかたちなのだろうが、常日頃から児童と接し教育に従事しているものと教育界の外で生きている人とは全く違う筈である。少なくとも人数の点で教育関係者が圧倒的多数であるべきだと思う。

3. 今頃の学生は昔とはかなり違う。

先ず教師の話聞いていない。ひとつ実例を挙げよう。私の授業では学生に音読をさせる。長い間学生たちがwork をwalk と発音するのを我慢していたが、或る日遂に堪らず発音記号を黒板に書いて間違いであることを丁寧に説明した。その直後いつもの様に指名して音読をさせると、偶々今注意したばかりのwork が出来た。すると驚いたことに又walk と発音したのである。この例が示すように教師の言う事を真剣に聞くという態度が身に付いていない。これでは勉強になる訳が無い。

基本的な躰が出来ていない。例えば授業中に無断でトイレに立つ。無論その都度注意するのだが、大学生にそれを言うのが情けない。

欠席届を無言で突き出す。すみませんとか、これをお願いしますとかの一言を副えることを知らない。

自分の言いたいことをうまく教師に伝えられない。あなたは何が言いたいのと聞き返すことが多い。これは恐らく育つ過程で親を始めとして周囲の者が世話を焼き過ぎて甘やかした所為であろう。自分で要求する前に周囲の人が先回りしてやってくれることに慣れ切っているのではないか。

自分のゴミの始末をしないで、居た場所にそのまま放置する。ゴミ箱がその場から数メートルのところにあっても。中には他人の家の塀の上に態々置いて行く者も居る。

場所を選ばず地べたに直接尻餅座りをする。そのまま教室の椅子に座るのに。

遅刻して来て、名前の申告の時に誰々、で終わってしまい、ですが付かない。

このような実態の根底には就学前の家庭での躰がなっていない、自分と教師との上下関係について理解が出来ていないという事があるのだろう。

4. 教育問題で教師だけに目を向けるのは片手落ち。

教育の成果が上がらないのは教師の所為と言うよりも生徒、学生の問題と捉えるべきだと信じている。恐らく七割は教わる側の責任であろう。この発言は私の様な責任の重くない者にしか出来ない。何故なら公の立場の人がこれを言ったら最後、正義の味方マスコミに袋叩きに合う事必定だから。しかし実際に現場で教育に携わっている人なら同じ考えの筈である。では教えられる側をどう変えたらいいのか。先にも書いた様に家庭教育の段階で明確に「教師は子供より上の地位にあり、教師から学ばなければ子ども自身が損をする」ということを教え込む事しかない。これが徹底すれば小学校で早や学級崩壊、などという信じがたい事が起こらなくなるだろう。

繰り返すが、家庭教育がしっかり行なわれれば、今の様々な社会問題の大部分は自然消滅するのではないか。マスコミの姿勢は大体において家庭・社会・学校を同列に置いているがこれは間違いで、ただ問題の在り処を曖昧にしているだけである。

5. 文部科学省の役人は最低三年間教壇に立ち、現場の実態を身を以って体験すべきである。

いろいろの教育施策を見てつくづく思うのは、彼等は人間を知らないなということである。もし普通の人間は勉強が嫌いなものだとして知っていれば「ゆとり教育」などという考えはまず絶対に出て来ない。自分たちが勉強家で有名大学を出て役人になっているから、無意識に特別な自分達にしか当て嵌まらないことを世の中全体に適用してしまうのではないか。私の様な並みの人間から言わせれば、勉強しなくてもよいならしたくはない、しかし、しなくては困るからする。これが普通なのだから、強制するものがなければ並の人は勉強しな

いという前提で考えなければ全ての施策は間違うのだ。そこで、今の普通の生徒、学生がどんな人種かを実際に教壇の上から見る経験をしたのちに本省に戻って欲しいと願う。

今既に「ゆとり教育」の見直しが始まった様だが、役人方は本当に潔さに欠ける人達だなと思う。決して間違ったとは認めないのである。反省の無い所から真の改善はなかなか出て来ないのではないか。

数年前に役人根性とはこんなものかと呆れる話を聞いた。監督官庁の査察(正しい役所用語かどうか知らない)の際に、出席簿のつけ方に注文がついたそう。その先生は私と同じく欠席者のところに×印をつける方法でしていたが、これは駄目で出席者にも何か印をつけよと指導されたという。こんな愚にも付かないことを偉そうに指図するのが役人の仕事なのかと心の底から腹が立った。

6. 徳育科目の不要を唱える様な人は中教審会長を即刻降りるべき。

戦後のいろいろな問題の根底に「修身」という教科がなくなったことがあると思う。誰もその通りの立派な人間になれなくとも、本当はこうあるべきだという人間の基本を幼少時に教えられることが重要ではないか。この会長氏は「教師の後姿を見せればよい」とか言った様だが、全くどこの世界のことを言っているのかと言いたい。今の世の中でそんな立派な先生ばかりが居るのかいと言いたくなる。しかし一方で中教審のメンバーを選んだ文科省の方針が目論見通り反映されたものと思えなくもない。役人はいざ知らず「国家の品格」がベストセラーになったことを考えても民衆は賢明にも今の日本人に品格を既に期待しているのではないか。どうも最近、国会議員とか役人、又、マスコミに対して貴方達が思っている程国民は馬鹿ではないよと言いたくなる時が多い。

7. 国語が危うい！ 文科省の国語担当者は何故声を上げないのか。

藤原正彦先生の言葉を借りる様だが、国語を軽視する様ではその国の精神は減んだことになる。英語ばかりが必要以上に重視されていないか。全国民にとって最も重要なのは英語ではなく国語の日本語である筈なのに文科省からは殆どそういう声は聞こえて来ない。バランスを取るべき幹部の責任であろう。漢字の制限もおかしい。何でもパーを低くする方向へ行く。昔の教育では小学校を終わるまでに社会生活に必要な漢字は全て教え生徒も習得していた筈である。今の日本人は馬鹿になって覚えられないと言うのか。高等教育が当たり前の豊

かな国になって却って易しくする方向に向かうとは大きな矛盾ではないか。

日本語の発音が混乱を極めている。昔はお手本と思われていたNHKアナウンサーの発音も既にどうしようもなく滅茶苦茶になっている。今思い出せる二、三の例は、「証言」の発音がおかしいこと、かなり人気の女子アナが「鑿」を「蚤」と発音したり、世界は違うが裁判員制度の説明に来てくれた若い検事さんが「証人」を「商人」と発音した。いい大人が意見を問われて、「～とは思いません」と言う。何故“は”が要るのだろう。曖昧な言い方ということなのか。又、敬語は安易に使われ過ぎて、最早その存在意義が失われつつある。小学校の先生には英語の早期教育など程々にして日本語の正しい発音を指導して頂きたい。

8. 教育界は身内に冷たい？

よく警察とか役人の不祥事のときにマスコミが「身内に甘い」と批判する。しかし私から見るとそれを良いとは認め兼ねるが、人情があると思う。それに対し教育界には人情は無く、あるのは自己保身の為の責任回避である。良い例が「理不尽な親」に教師がぶつかったときの上司たちの対応である。先ず教師の指導力が足りないと言われる一方で、生徒の方に問題は無いのかというチェックは入らない。親も心得たもので思い通りにならないと教育委員会に言うぞと脅す。教育委員会も教師の味方はしない。誰も味方をしてくれないのに教師一人で親と対決出来る訳が無い。なにせ相手は常識の通用しない相手なのだから。かくして理不尽が堂々と罷り通り、そして益々増長していく。何故教育界が挙って連携して一枚岩になって理不尽な要求を撥ね付け、正道に戻せないのだろう。やはり不当な事を許さない為に戦う人が極端に少ない世界ということであろう。本来その地位に相応しくない人がその職に就いていると言えよう。

翻って考えると世の中全体に不当な事と戦う人が少ないと思う。凶々しい者がのさばる世の中になってしまった。私も下手な口出しをして暴力を振るわれるのは正直御免蒙りたいが、言葉での戦いすら始めから諦めるのだけはしたくないと思っている。

9. 学校の責任範囲を限定せよ。

学校の生徒が問題を起こすとマスコミは先ず学校の指導責任を問う。校長を始めとして学校の幹部たちは何の抗弁をする訳でもなく、唯々諾々と批判に甘んじている。しかし問題の殆どは学校の本来の責任範囲に入らないとして拒絶

してもいい事のように思われる。責任でもない事を引き受けることは無責任とも言える。単にその場を無難に乗り切る為に戦わないと見える。実際殆どの問題が家庭教育の責任であるのにそれをはっきり言わないからいつまでも根本的な解決にならないのだ。

よく校長が問題発生の際にその生徒の日常の状態をよく把握しているような話をするが、これには白ける。一人一人の生徒の把握は担任には出来ても、校長は無理だと思いが、本人は平気でそう言う。自分の立場を守る事の方に頭が回るのだろう。一人だけ、「担任の話では」と前置きした校長を記憶している。この人は正直だなと思ったものだ。

学校とは知識を身につけさせる場所、その為に勉強をさせる場所であってそれ以外は責任範囲ではないとはっきりさせたら、教師はどれ程雑務から解放され教育そのものに専念出来るか。文科省の唱える「生きる力」とか「考える力」などは実に抽象的、曖昧模糊としている。教育現場が具体策が分からず右往左往するだけではないか。口当たりの良い言葉遊びが好きなのか。

10. 平等は機会の平等で十分。

何にでも平等を期待するのは全く馬鹿げている。教育においても良い教師が指導すれば誰でも勉強が出来るようになるが如く一般に考えられている。いや教育の総本山たる文科省の役人もそう考えているのではないかと思わせるところがある。同じ事を教えてもよく吸収してどんどん学力をつける子もいれば、その反対もいる。当然である。こんな明瞭な事実が何故前提にならないのか。聞くところでは、ドイツの子供は既に小学校の段階で頭脳を生かすコースと身体を使うコースに分かれるという。これは人間をそれぞれ特性を持った生き物と客観的に見極めているということだと思う。この話になるとよく例として挙げるのだが、鳶という職業がある。あれを私にやれと命じられても絶対に出来ない。ではもしこの仕事を出来る人がこの世の中に存在しなかったらどうなるか。世の中は回って行かないであろう。職業に貴賤がないと言うのはこの事に依るのではないか。すべての人がそれぞれの得意分野で活躍するのが幸せであり、最も効率の良い世界をも造るのではないか。勉強が好きでもない子が親の夢の為に最高学府に送り込まれるのは悲劇としか言い様がない。

教育の世界で平等主義を掲げると目立つエリートを出さない為に低い方にレベルを合わせることになる。そうしてエリートとなるべき折角の能力も生かさ

れず仕舞いに終わる。世の中にとってこれ程勿体ないロスがあろうか。教育の世界に結果の平等が無いことをはっきりと認めるべきである。そして同時に学問をすることだけが人生で幸せとは限らないことを子供たちに教えるべきだ。先日NHKが私を感動させる番組を提供していた。“技術五輪”である。そこには学問以外の手先の器用さですば抜けた能力を発揮し自信に満ちた人生を歩み始めた若者たちがあった。

11. 大学の補習授業は情けない。

何故小中高の教育の不足のツケを大学が背負い込まなくてはいけないのか。大学はもっと主張をすべきではないか。しっかり教育して送り込んで欲しいと。今の事態の改善には小中高で落第をさせることだろう。特に義務教育でない高校ではどしどし落第させるべきだ。こうして緊張感を持たせることが必要だ。平和と豊かさに囲まれ、ぬるま湯的な環境の中で育ち、だれた、若者らしいいきりとしたところの無い子供が多い。服装にも歩き方にもしまりが無い。

大学入学時点で英語の力が足りない学生を補習によって出来る様にする事は不可能に近い。出来ると言う教師が居るなら是非やり方を教えて貰いたい。英語の様な努力の積み重ねによってのみ出来る様になる科目の場合、中高六年間の遅れを取り戻すことなど不可能である。

閑話休題、少々英語教育そのものから逸れた事柄について書き過ぎた様だ。そろそろ本題に触れなくてはならない。

12. 小学校の英語教育

国語である日本語の教育がこれに優先する形で十分に行なわれることが保証されれば反対する理由はない。但し、これが中学校での英語教育にレベルの上でスムーズに繋がって行くことが条件になる。英語に対する興味を持たせるという程度のことを狙うのであれば、全く時間の浪費である。つまり遊びの域を出ない様な授業であってはならないということである。中学英語の基礎とするには教材を寓話とし、発音を正確に指導して貰えば良い。文法は余り深入りしない方が良くであろう。しかしこの時これらを成し得る教員は充足されているのかということである。文科省の悪いところは現状無視で自分たちが命じれば直ちにその通りになるといつも思い込んでいるところだ。以前私が課外授業の

為に雇ったALTが小学校に教えに行くと言うので、話を聞いたら実は生徒でなく先生を教えに行くのだと答えた。今でも状況は変わってはいまい。

13. 時期を誤ったコミュニケーション重視の英語教育は決して「国際人」を育てない。

結論から言えば、高校までの英語教育は「読み」「書き」に集中すべきだということである。この期間に「話す」に重点を置いていると話の内容のレベルが高くなり得ない。知っている語彙・表現が内容を制限するからである。NOVAの猿橋という人は曾って「英語は耳から覚える」とのたもっていた。この一言で私はこの人物は外国語の習得過程を分かっていないなと思った。間違った考えを流布するような企業は早く潰れるといいと思っていたら周知の通りの結末を見たので、少し溜飲が下がった。確かに母国語は耳から聞いて長い時間を掛けて覚える。しかし日本語の環境の下で英語の語彙を覚え、増やすには英語の本を「読む」ことしか方法はない。そして覚えた英語を頭の中に定着させる為には何度も何度もそれを使わなくてはならない。「使う」には「書く」と「話す」がある。この二種類のoutputのうち「話す」は条件の制約を受ける。先ず本人が言いたい事をその場で相手を余り待たせることなく英語で伝えられるだけの英語力を備えていなくてはならない。だから英語の学習の初期段階でこのスキルを身に付けようとするのは無理がある。更に「話す」為には相手が居なくてはならない。学ぼうとする積極性の余り外国人と見れば話し掛けるというのは相手からすれば迷惑千万かも知れないと思ひ遣るべきだ。一方、「書く」は独りで自分の知っている範囲の語彙と表現を用いることで出来る。そして繰り返し使うことで英語を頭に定着させることに繋がる。

「国際人」とは何か、について多くの人と言うのは、先ず日本人としてidentityを持つべきだということである。大学生にもなればそれは出来ていると思ってよいだろう。その上に中高六年間に培った英語力を以って一気に「話す」力を伸ばしてはどうか。この時に生かすべきなのがnativeである。但しそれはただ英語を話す外国人ではなく、然るべき資格、例えばTESOLの保持者だけを雇う。贅沢を言えば日本語を学んだ経験を有する人が望ましい。一方で英語で遊んでいるような中高のALTは税金の無駄遣いであるから全廃する。

中味のレベルの高いコミュニケーションが出来るのが国際人と言うべきであろう。日本からの発信と言う場合、書いたものによる発信と口頭での発信とど

ちらが機会が多いか、又、その主張に接することの出来る人数はどちらが多く期待できるかを考えると、先ずしっかりした英文を書ける人材を育てておくべきだろう。この点からも「読み」「書く」力の養成が中高で十分に行なわれることが大事であろう。コミュニケーションの力は大学で英語の基礎がしっかり出来ている者を対象に鍛えればよい。とすればセンター試験におけるリスニングは不要であり、あの一人一個の膨大な税金の無駄使いと受験者の我が儘を許すような再試験という阿呆らしい労力の無駄遣いもなくすることが出来るではないか。

コミュニケーションなどという術語自体が無かった時代に英語を勉強した世代が海外で立派に英語で仕事をして活躍して来た。何故出来たか。「読み」「書き」を通じて語彙・表現・文法という基礎がしっかりと出来ていたからである。基礎がしっかりしていれば、それを使うことで会話能力は飛躍的に伸びることが期待出来る。

14. コミュニケーション重視の割には音読の指導がされていないのでは？

前にも書いた様に音読をさせると、どうもこれまでクラスで発音を直されていなかった様だ。前の例の他にwereはwearと、warはワー、tはト、dはドと発音する。定冠詞も日本語のジだ。難しい単語ならまだしもこれ位の単語の発音はきちっと身に付いていてもいいのでは。これも会話重視で「読む」ことを軽視してきたツケが回って来たということかも知れない。いちいち単語の発音を直しては会話にならないだろうから。

15. 国民皆英語達人は所詮無理な話。

何故日本人は英語に取り憑かれているのだろうか。国際化時代というのはその通りだ。だからといって今ほど英語の必要性を喧伝する必然性が何処にあるのか。私が英語の教師であるにも拘わらず、学生たちに「皆のお父さんの中に英語が出来ないから会社で出世出来ないと嘆いてる人は居るか」と問い掛けるのは英語の必要性についてよく考えて貰いたいと思うからである。植民地時代を経たアジアの諸国では英語は人生の成功者になる為の必要条件であろう。しかし日本では英語が出来なくても普通の人生を歩むことが十分に可能だ。必要性を痛感しないのに英語のように必死の努力を要することに誰が好き好んで取り組むか。それと英語の習得には剃刀の様な鋭い頭脳を必要としなくとも、たゆ

まぬ努力を続けるという最も重要な能力と言うか、適性を必要とする。この条件を備えた学習者はどう考えても絶対に全員とは成り得ない。

英語が国際共通語としての地位から滑り落ちることは当分ないだろう。しかし現状は度が過ぎていると思われる。兎に角英語は大学に入ったら必要を痛感する者だけの選択としていいのではないか。そしてアラビア語と中国語を選択対象に組み入れたらどうだろう。英語について今必要なのは中途半端な英語力でなく、少数でも高度の英語能力者ではないか。

16. 教養英語と実用英語

英語は日本人にとって完成が無い、終わりの無いものだ。そうなると究極的にはESPの考え方をもって当の方が効率がいい。大学では教養と実用の両方を追究する必要がある。狙いが異なれば勉強する英語の内容も変わって来る。英語を専攻としない学生や英文学を目指す学生はレベルの高い教養英語を相応しい教材によって学ぶ。実用英語は将来英語を使う仕事に就こうとする学生を念頭において時事英語と商業英語を中心に学ばばよい。実用グループは更に先に触れた様な有資格nativeによる英会話の授業が必須となる。しかし本当の会話力は教室よりも、その外で自分自身で身に付けるものだと言っておきたい。如何に頻度高く英語を如何に多く話したかで決まるものだと言ってよいだろう。学生のレベルを上げようとするれば、少なくとも能力別に二クラスに分ける必要がある。当然教師の数が多くなる。それを経営側が許すかどうか成否に関わって来る。

17. 英語は結局丸暗記しかない。

丸暗記という言葉は能無し馬鹿に当て嵌められている様だ。しかし外国語は丸暗記しかないのではないか。又、日本語を介して英語を理解することを否定する先生も多い様だ。頭の中に日本語が詰まっている我々が日本語を使わないで言葉を理解することなど有り得ようか。英語で考える、という境地に到達することを目標にすることは結構であるが、学習の初歩の過程でこれは無理だろう。英語の学習方法を複雑にする必要はない。要は自分が言いたい或いは書きたいと思う日本語に対応する英語を覚えればいいのではないか。日本語と英語の対比によって初めて英語の特徴も英語的な発想も浮き上がってくるのではないか。本学の田島松二先生が著書の中で、「わが国で行われる英語学の研究は、

意識すると否とにかかわらず、何らかの意味で日英語比較が根底にあるといつてよい。」と記されているが、我が意を得たりという思いである。

英語の習得に関して、頭の中の見えない働きについて抽象論を展開するのは意味が無い様に思う。学者でない私はよく知らないが、英語国の言語学者の言説の影響があるのだろうか。

18. 日本語を学んだことのない学者の言語学を日本の英語教育に応用するのは間違い？

学会で参考文献として恐ろしい数のnative言語学者の著作が列挙されていることが多い。恥ずかしながら全く読んだことがない。しかし考えてみると語系も言語構造も全く違う日本語を学んだこともない学者が何を書こうと日本人の英語教育に役立つ理論は発見出来ないのではないかと自分に都合よく考えている。実際私の受け持った授業においてこのことで何の不都合も無かったのである。この辺りのことについて、田島先生が著書の「まえがき」で「相も変らぬ欧米の研究追随の風潮・・・」とされていて心強く思った。

19. 学会は文科省の走狗か？

英語の教育に関する限り、現場で指導している教師たちの声が文科省の諸施策に反映される様にリードして行くべきだろうに、幹部になるほど声を上げなくなり、寧ろ役人の広報担当者に成り下がってしまう様に見える。小学校での英語教育の問題の時に特にそれを感じた。今のままでは日本の英語教育の迷走が何時までも続くのではないだろうか。例えば、関係代名詞は何時から教えるなどは余りにも細か過ぎる指導ではないか。学習指導要領などプロである現場の教師に何故任せられないのか。

おわりに

ここまで書いて来て矢張り纏まりの無い文章になったなと思う。しかし十二年の間に溜まった感想を全部吐き出した様な気がする。この機会を与えて呉れた学科長の上田先生に感謝したい。これからの本学の英語教育の発展と成功を外からではありますが、祈っております。有難うございました。